

新しい都市理論

工業社会の都市過程

L. ライスマン著

星野郁美訳

鹿島出版会 A 5 版 265頁

1,200円

都市社会学的分析による社会変動理論

今日われわれは都市問題の激化になやみ、その解決に日夜苦勞しているが、都市問題について明確にそして正しくその意味を理解したのはそんなに古いことではない。こうした歴史の浅きにかかわらず、学者、研究者による都市問題へのアプローチはいろいろ行なわれてきた。すなわち、(1)都市行政からのアプローチ、(2)都市社会学的手法、(3)経済学、ことに近代経済学による“計画”を舞台として行政に結びつく地域開発論、(4)建築家からの都市計画、フィジカルプランニング、(5)さらに文明論としての都市問題の提起などである。

これらのアプローチは、その時期に即した問題提起としての意味と有効性をもってしたが、一貫した都市理論の形成にまでは至らなかったといつてよいだろう。都市理論について、われわ

れはまだまだ諸外国に負わねばならない。

本書は、現代社会を都市的工業社会と規定した上で、工業社会において都市を都市たらしめている過程を論じた都市理論の書である。著者ライスマンは現在ニューオーリアンズのチュレイン大学社会学部教授で、社会成層と都市社会構造を専門としている。したがって、本書の手法は都市社会学的分析をとっている。著者は、既成の都市理論を検討して三つの欠点を指摘する。すなわち第1は、都市理論の極端な単純化である。第2は歴史の範囲からのみ都市を眺めようとする試みであり、第3は工業都市のもっとも顕著な特徴である社会変動を扱おうことができない点である。

これに対して著者は、都市化を世界的な視野と社会変動というダイナミックな側面からとらえ都市化の要素として都市成長、工業化、中流階級の出現、ナショナルリズムの台頭の4つをあげる。そしてこれらの要素の発展の度合いを測定することによって、発展段階の異なった社会についての類型学を構成するのである。その意味で、本書は都市理論というより、むしろ社会変動の全体理論であり、都市の分析を包括的な社会分析を通して行なったものといえるだろう。

もとより本書に、大都市問題を解決するための処方箋として書かれたものではない。しかし、適切な都市理論の発展の必要性をととき、「類型学は、都市とその要素、ダイナミックス、そして複雑性を体系的に理解するという目標に向かって相当の前進をすることができた」とする著者の自信にみちた書物である。

<M. I. >

あとがき

大都市における都心部の過密化と周辺地域の無秩序な開発は、数多くの都市問題をもたらしております。横浜市はまさにその典型的な縮図であり、都心部と郊外部のアンバランスがはなはだしく、とくに港北、戸塚、保土ヶ谷、南の郊外4区を中心に驚くほどのスピードでスプロールが進行し、美しい緑や自然を食いあらし、市民の生活そのものを脅やかしております。毎年100万坪以上の宅地化が行なわれている横浜市においては、もはや一刻の猶予も許されず、宅地開発要綱を制定し開発を強力に指導しております。この意味において今回の特集は、今後の貴重な指針となるでしょう。ご多忙中ご執筆下さいました皆様

<N>

調査季報

19

1968年10月31日

編集・発行——横浜市企画調整室

横浜市中区港町 1—1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町 2—22